

## 第 21 話 官軍の京都回復運動

吉野の朝廷は、足利氏の内訌に乗じて、しばしば京都の回復を図られる。

一方、京都では、足利尊氏が東国に下った後で、両朝の合一が発表され、やがて後村上天皇の御還幸になることが分かったので、今まで京都に付いていた公卿達も皆、先を争って賀名生の行宮に参上した。このために、昨日まで淋しかった大和の奥の山の中が俄かに時ならぬ花を咲かして、幔幕を張り廻した人々の宿所となった。

### 後村上天皇の住吉遷幸

後村上天皇は、そういう中で、万端の準備をされていたが、正平 7 年 2 月 26 日、先づ摂津の住吉に行かれることにして、賀名生を發して、その日は河内の東條に着き、楠木氏の城に入られた。その行幸の行列は、元弘三年の夏、御父の後醍醐天皇が伯耆から御還幸の時と同じく、専ら軍装をした武



大阪 住吉神社

士に警衛させられた。28 日に住吉に遷られて、住吉神社の祠官津守国夏の邸に暫く逗留になることにした。

尊氏の降伏が本心から出たものではないことは分かっていたので、こちらでもその計略の裏を搔いて、完全に京都をご回復になさるために、ここで相当の軍勢を集めて京都に向おうとされたのです。間もなく、伊勢の国司の北畠顕能が 3,000 余騎を率いて馳せ参じたので、天皇は閏 2 月 15 日に住吉を發して天王寺に進まれた。

### 足利義詮の狼狽

足利義詮はこれを聞いて、始めて天皇のご還幸が、その実は幕府を滅ぼすための進撃であることを覺り、窃かに軍勢を集めて、万一の場合の逃げ路を近江路に用意すると共に、天王寺に使いを馳せて、両朝ご和睦の条件を改めてまた申し上げた。しかし、天皇はそれに対する勅答はいづれ男山にて申し渡すと仰せられたただけでしたので、使いは空しく帰った。義詮は大いにあわてて、いよいよ防戦の準備を急いだ。

### 男山に鳳輦を進める

天皇は、19 日に、更に鳳輦を男山八幡宮に進めて、祠官田中定清の邸を行宮とされたが、その翌 20 日には、早くも北畠顕能、楠木正儀、千種頭経らの率いた官軍が 3 方から一時に京都に乱入して、攻撃を始めたので、義詮は細川顕氏、同頼春らをしてこれを邀えて戦わせた。けれども、足利軍は、

## 第21話 官軍の京都回復運動

どの方面もさんざんに敗れた上に、大将の頼春も戦死したので、義詮は遂に支えることが出来なくな  
って近江に逃げた。

### 京都回復の成功

かくて、京都は全く官軍の手に帰し、吉野の朝廷の久しい御希望でした京都ご回復のご計画は、ここ  
に一先づ達せられたのです。それで翌21日、北朝の光厳、光明、崇光の3上皇及び前皇太子直仁親  
王は後村上天皇に迎えられて、八幡に遷られ、後、3月3日に河内の東條に遷られ、更に5月2日には  
賀名生の行宮に遷られた。

しかし、この時の官軍は、その実力がまだ十分に京都を保つに足らなかったもので、天皇は直ぐには  
入京にはならず、四條隆資、楠木正儀らに奉ぜられて、なお男山の行宮にご滞在になり、京都は北  
畠顕能に鎮めさせ、父の親房にこれを輔けさせられた。

### 官軍の敗退

ところが、近江に走った義詮が忽ちまた大兵を集めて、3月13日には早くも進んで京都を襲った  
ので、もとより守備が薄弱であった官軍は、戦わずして退いた。義詮は本陣を東寺に移して、軍を  
男山に進めると共に、一軍を八幡の南方の洞ヶ峠に遣って、官軍の糧道を絶たせた。この時、官軍  
は、東は信濃の宗良親王、西は九州の懐良親王に勅りして、援兵を送らせる手筈になっていたが、その  
援兵が容易に来ないうちに、山名時氏は山陰の兵を率いて義詮を援けて、薩摩の島津氏、伊予の河野氏  
らの兵も義詮の軍に加わった上に、赤松則祐もまた既に叛いて義詮に付いていたので、賊軍の勢いはま  
すます盛んで、遂に完全に男山を包囲した。

官軍は頗る苦戦に陥ったが、山上の嶮に天皇を奉じてよく防ぎ、5月の初めまでは辛くも持ちこ  
たえたのでした。ところが、兵糧が次第に欠乏して来たために、官軍の兵は疲れ、士気は衰え、山を  
遁れて落ちる者も少なくなき、遂には北畠顕能の重臣までが、敵に降参して出たので、今は囲みを衝い  
て抜出る外には策がなくなり、5月11日の夜、北畠顕能、名和長重らが兵を率いて供奉して、天皇は大  
和路を落ちて行かれた。

### 四條隆資の戦死

この時、敵の追撃が甚だ急でしたので、官軍の将士は返し合わせて、戦っては走り、戦っては走  
りしたので、討ち死した者が頗る多く、四條隆資の如きもその1人でした。隆資は元弘の乱に笠置の  
城が落ちて以来、常に先帝をお輔けし、しばしば軍功をも立て、吉野の朝廷には殊に大事な功臣であつた  
のに、ここに討ち死したのは、誠に惜しむべきでした。この時、後村上天皇の鎧にも矢が2筋まで立  
ったというほどで、いかに賊兵の追撃が烈しかったかが分かる。天皇は辛うじて河内の東條まで落ち延  
びて、楠木氏の城に入られたが、やがて賀名生の行宮に還幸された。

### 京都回復の失敗

## 第 21 話 官軍の京都回復運動

かくして折角の京都のご回復は失敗に終わったが、予ねて密使を立てて諸国の官軍と打ち合わせて置かれたので、天皇が男山にお出ましになった前後に、官軍は諸国に競い起こって、その勢いも一時は中々盛んでした。そのうち、東山、北陸、四国、九州の諸国からは、京都に向けて援兵を出したのですが、残念な事に、男山が早く陥ったので、途中でそれを聞いて、皆力を落として引き返しました。

### 新田氏一族の東国経営

また、東国では、新田義貞の子の義興、義宗、および脇屋義助の子の義治が、上野に兵を起こして、正平七年閏二月、武蔵の府中に進んだ。尊氏は官軍が優勢なのを聞き、これを防ごうとして鎌倉を出て、武蔵の神奈川城から小金井原に進んだので、義宗はこれを撃って大いに破り、義興、義治の 2 人は鎌倉を襲って基氏を走らせ、ここを占領して本拠とした。この時、信濃におられた宗良親王は、上野から武蔵に兵を進められて、小手指原 — 今の所沢の近く — で、親しく義宗の陣に臨んで士気を鼓舞された。この時、親王が詠まれたお歌に、

君がため世のため何か惜しからん すててかひある命なりせば

というのがあつた。お志の一端を窺うことができます。

### 新田義宗の敗退

さて尊氏は、間もなく大兵を集めて、その月の 28 日に小手指原に義宗の軍を攻めた。この時から官軍はしばしば敗れて、遂に比企郡の笛吹峠（須江村）まで引き退いたが、そこをも支えることが出来なくなって、親王は再び信濃に赴かれ、義宗は越後に遁れた。義興、義治は折角鎌倉を占領したのだが、義宗が敗れて遠く退いてしまった上は、逆も保つことが出来なかつたので、3 月 2 日に鎌倉を去って相模の河村城に拠った。尊氏は間もなく鎌倉に帰った。かくして関東に於ける官軍の計画もまた破れたのですが、河村城はその後も容易には落ちず、翌正平 8 年の春までよく守つたので、尊氏はなお関東に留まって、新田氏の再興に対して備えなければならなかつた。

### 足利義詮、光厳院を立てる

一方、京都では、八幡の戦いで、朝廷のご計画が破れた為に、尊氏、義詮らの降参も自然と消滅したが、この時、北朝の 3 上皇および前皇太子は賀名生の行宮に拘えられ、武士の警護が嚴重だったので、京都へはいつ帰られるか分からない。しかし、既に両朝の合一が破れた上は、京都にも天皇がおられなければならないので、足利義詮は京都の公卿達とも相談の上、光厳院の第 2 の皇子で、崇光院の御弟の弥仁王を立てて天皇と申し上げることにした。後光厳院がこれです。

こうして、義詮はまた京都の朝廷を奉じて元の通りに政治を執つた。世はまた南北の両朝に分かれたのです。

この後、京都は暫く平穏でしたが、地方では武士らが互いに勢力を養い、敵と身方に分かれて、到る処に争いを繰り返していた。尤もこれには、直義党であつた者らが、足利直義が殺されたため

## 第21話 官軍の京都回復運動

に、南朝に降って官軍となり、恨みを尊氏らに報いようとしたのも少なくなかったので、今までの官軍と賊軍とは違った意味の戦いなども方々に行われたのです。

あしかがただふゆ なんちょう くだ  
足利直冬、南朝に降る

殊に九州探題の足利直冬は、直義のおかげで勢力を保っていたのですから、直義が殺されると共に、忽ち敵の一色範氏らに攻め落とされて、遂に九州にいられなくなって長門に遁れた。けれども、尊氏、義詮らは元からの敵ですから、京都に帰るわけにも行かない。それで、彼もまた直義や尊氏らの例に倣って、南朝に降り、官軍の勢力を借りて敵の一派に当ろうと考えた。

その頃、直義の部下でした石塔頼房、吉良満貞らは既に南朝に降っていたので、直冬は彼に頼んで降参を願い、お許しを受けると、大宰府の少貳頼尚と連絡して、官軍の菊地武光と共に、一色範氏を討とうとした。この時、一色範氏は官軍に属していたのですが、直冬が官軍になったので、南朝に叛いて、一方で少貳頼尚は直義党として官軍に属しました。

すべて足利氏の武将らは、ただ自分の野心を満足させようとして一身の利害の上から或いは敵となり、或いは身方となったのですから、官軍に属するといっても、その本心は容易に信じられないのです。朝廷ではそれをもよくご承知の上で、彼らが身方に参るのを機会に、これを利用しようと思われたのです。

かいふく  
官軍、しばしば京都を回復する

こうして、足利氏の内訌で降参して来た諸将の力を用いて、この後も正平8年に1度、正平10年に1度、官軍は京都を回復しています。

8年の時には、6月に、足利氏に叛いた山名時氏と共に、楠木正儀らの官軍が進んで京都を占領しました。この時、足利義詮は後光厳院を奉じて美濃に奔ったが、やがてまた大兵を率いて京都に迫ったので、官軍は退いた。尊氏が漸く新田氏を破ったのもこの年で、彼は8月に鎌倉を発して、9月に美濃から後光厳院を奉じて京都に帰った。

10年の時には、足利直冬、山名時氏らが、その他の直義党と共に、尊氏を近江に走らせて、正月早々に、京都に入ったのです。この時、義詮は播磨にいたが、引き返して山崎に陣して、東から進んだ尊氏と相応じて京都を奪い還そうとした。戦いは2月6日から始まって、3月12日まで続いた。非常に激戦も幾度かあった後に、遂に官軍が敗れて退却したので、その月の28日に後光厳院は、先きに難を避けて遷られていた近江の行宮から還られた。

こうして幾度か試みられた南朝の京都ご回復の計画も、その都度、奪還されて、遂に成功しなかったもので、その後は暫くこれを試みられませんでした。

( 第21話 官軍の京都回復運動 終わり。次は前頁に戻り、第22話 懐良親王と菊池武光 へ )